

## 岩崎泰男先生を送る

押 本 年 眞

岩崎泰男先生は、1998年3月末日をもって、長い間お働きになった同志社大学を、ご定年により退職されることとなった。

先生は1933年に京都市でお生まれになった。鴨沂高校をご卒業後、同志社大学文学部英文学科に学ばれ、さらに大学院文学研究科に進まれ、60年には文学修士となられた。

先生のお仕事は多岐にわたる。まず第一に、先生は教える人であった。同志社大学では、1961年に嘱託講師として教え始められ、63年に商学部専任講師として着任され、66年に助教授、72年には教授となられ、93年からは、学内再編により言語文化教育研究センターの所属となられた。この間、三十数年にわたり英語教育に尽力された。お若い頃には、外国語担当者の担当時間数が非常に多かったり、また、ある時期は学生運動の激動期もあってさまざまのご苦勞があったようである。しかし、常に誠実に教えられる先生の印象が強い。

その三分の一世紀を超える間には、教室で教えること以外にも、さまざまな公務があるものだが、先生は、また研究者として多くのすぐれた業績をあげられた。ご専門は、一貫して十七世紀末から十八世紀前半のイギリス文学で、とりわけ文学と社会経済思想の関係が研究の焦点であった。

ご業績の主なものとしては、まず1982年に発表された著書『スウィフトの時代の政争と文学』(英宝社)がある。十八世紀初頭には、王朝交替とからんでトーリー派とホイッグ派の対立が激化したが、その際に政治的党派の政争の具として用いられた小冊子や文学作品における寓意を具体的事実と対比さ

せて論じられたものである。

先生はまた、翻訳を得意とされ、何冊かのまとまった訳書がある。1973年には A. ポープの *The Rape of the Lock* を訳された『髪略奪』(同志社大学出版部)を出された。さらに、宮廷医でポープの知人でもあったスコットランド出身の諷刺作家 J. アーバスノットについても研究を進められ、1978年に *The History of John Bull* を『ジョン・ブル物語—裁判は底なしの奈落—』(あぼろん社)と題して貴重な翻訳を完成された。「ジョン・ブル」はイギリス人のニックネームであることは、今日では日本人でも知っている人は多い。しかし、その名の定着するもとは実はこの書にあることを知る者は多くないであろう。

ポープとアーバスノットの関係へのご関心からポープの *An Epistle from Mr. Pope to Dr. Arbuthnot* の翻訳を手掛けられ、『アーバスノット博士への手紙～諷刺への序言として～』(英宝社)と題して1991年に上梓された。ポープの作家研究をめざす人には、彼の諷刺の目的と意義を知る上で参考となる点が多いことであろう。1994年には、デフォーが1697年に発表した *An Essay upon Projects* を『十七世紀末の英国事情～デフォーの社会改善計画～』(同志社大学出版部)と題して、訳書を完成された。内容は約300年前にデフォーが近代的な諸制度を提案したものである。デフォーの思想的原点を知りうる書ともいえよう。

翻訳されたものは、内容的には絶妙な諷刺や寓意にみち、複雑な時代背景をもち、また表現形式の面では擬似英雄詩の脚韻、芝居の脚本に似た部分、書簡体詩とさまざまで、正確で読みやすい日本語にするには、大変なご苦労があったことと想像される。

論文もまた多数発表された。日本英文学会の『英文学研究』には、「*An Epistle to Dr. Arbuthnot* における Physician-Sufferer Imagery について」を1976年、「『桶物語』における偶像のイメージ」を1978年に発表された。同志社大学人文学会発行の『人文学』、『同志社大学英語英文学研究』にも「*A Key to*

*the Lock* の秘められた意図」(1984年)などポープを中心に十八世紀英文学に関する論文を多数発表された。その中には、「十八世紀の英国における儒家思想の運命」(1970年)は中国関係の研究者に、「ジョンソン博士の『英語辞典』と『ジョン・ブル物語』」は英語学研究者にそれぞれ意義が高く評価されるといったユニークな価値を持つものが含まれている。

岩崎先生はまた、大学内のさまざまな役職も担われた。主なものだけでも大学評議員、学部教務主任、英語科の研究室主任、科目主任等の職責を果たされた。特に英語科目主任は全学にわたる英語の多種多数のクラスの運営、教育内容の充実、会議のとりまとめ等ご苦労が多かったことと思う。入試出題責任者や、創刊時に尽力され本号で一段階を終えるこの『同志社大学英語英文学研究』の編集委員としても熱心に努力された。

このように、岩崎先生は仕事に有能な方である。しかし、先生のお人柄は温厚でゆったりとした、またスマートな紳士である。京都の夏の風物詩である五山の送り火の際には、左京区松ヶ崎に代々続く岩崎家は「妙」の字の一面が担当であることや、時折語られることから、古都の伝統の中に育たれた方、また、よき家庭人のご日常がうかがえた。

ご趣味も特記すべきものなしと謙遜されるが巾広く、謡を楽しまれ、ゴルフに熱中され、めきめき上達された。同僚の出版を祝う会の発起人や、英語科研究室の希望者が早春に一泊旅行をする際の幹事もひきうけられた。そのような折には、まことにゆきとどいた世話をされる、洒脱なお人柄の名幹事であった。

近年、先生のお身体が不調であることは、まことに残念で、ご心中を察して余りある。ご退職後は、ご健康を取り戻され、日々を楽しく、おだやかにすごされることを切に祈念する。